

---

# 明日に背く花

葉月 六花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

明日に背く花

### 【Nコード】

N4580D

### 【作者名】

葉月 六花

### 【あらすじ】

新しい生活が始めるため故郷を離れ少しずつ大人へと向かう女の子の成長を描く。社会、人間関係、友達、そして恋愛を通して生きることの辛さと喜びを知っていく。まだ都会へ出る前のお話です。

これから何が私を待っているのだろう

「小野寺まどか。18歳。地元の高校卒業したばかり。志望の動機は、都会に行きたいから・・・じゃなくって、お客様に笑顔を提供し、自分も笑顔になりたいからです！」

右手を空に向けて高く高く上げて元気よく一人の女の子が言う。桜もまだ咲いていないまだ肌寒い中、家から少し離れた駅の向かいの公園でパンダの遊具の上に乗った彼女は白いダウンコートを羽織り、ベージュの毛糸の帽子をかぶり、短いパンツ、ブーツのいでたちである。

「元気でよろしいこつてすね。ってか、おまえは寒くないのかよ。」

隣の蛙の遊具に座って縮こまっているのは、まどかの友人の宮本翔平。

「ちゃんとストッキングはいてるから大丈夫。冷えは大きくなってから困るのよってお母さんが小さい頃からずっと私に言うから教えるちゃんと守っているのよ。」

ちよつと偉そうにまどかが言う。翔平は怪訝そうな顔でまどかを横目で見た。

「じゃあ、そんな格好するなバカ。意味ねーじゃん。」

するとまどかは翔平を見る。

「そんなこと無いよ。素足よりはあったかいんだよ。」

そう言うのと遊具に座って腿の辺りを左手でさすり出した。翔平はあごを引いて鼻の辺りまで上着の襟で隠している。

「俺はもう耐えられない。どっかの建物の中に入るか、俺に暖かい飲み物でも買ってくれ。」

この時、時刻はまだ午後三時頃で日差し of 当たる天気の良い日ではあったが、砂利で表面が黒くなった小さな雪の山が、まだ道路や空

き地の脇にしぶとく残っていた。遠くの山にもまだ真つ白い雪が積もっているのが見える。

「君は若者らしくないねえ。」

まどかは翔平をまた見た。しかし翔平は返事もせずさつきよりも更に縮こまっている。よく見ると小刻みに震えていることにまどかは気づき、パンダから降りた。

「しょうがないな。じゃ、家でゲームでもしようか。あつたかい飲み物もあるし。」

「おお、そうするべ。」

急に元気になった翔平は、実はそう言ってくれるのを期待していた。

「ねえ、今度また一緒にバスケしようね。」

まどかが鞆を肩に掛けながら言う。

「いいけどお前じゃ俺の相手にならん。」

「ちつ。」

文句言いたげにまどかが舌打ちをする。

「そんなこと言って、さつきバテてもう動けな。いって情けない声を出してたのはどこのどなたでしたっけ？技はあっても体力無いじゃん。」

ぶいつとまどかは先に歩き始めた。

「なんだと？こう見えても俺は部活入ってなかった奴らの中では体力ある方なんだぞ。それに俺は偉いから煙草も吸わないしな。」

翔平がちよつと偉そうにバスケットボールを人差し指の上で回しながら言う。

振り返ってまどかは

「それは当たり前！もう、早く行くよ！寒いんだから！」

まどかは小走りになった。翔平は後を追って走り出した。

「やっぱお前も寒いんじゃないかー！！このバカー！！」

その叫び声をスタートに二人とも全力疾走である。

高校を卒業したばかりのこの二人は、今は新しい生活に向けての準備期間。

二人がそれぞれ暮らす町には学校は高校までしか無い。一番近い大学でもここからバスで片道一時間半はかった。しかし皆がすべてその大学に行くわけでは勿論ない。進学する者はやはり学校の沢山ある大きな町へ出なければならなかった。

この町に残るものは地元の会社に就職する者、家業を継ぐもの、家事手伝いなどそれぞれはあるが、純粹にこの土地に愛着を持つて残ることを決意したものは一握りであろう。

だいたいの者は大学や専門学校を卒業した後、そのままその土地から通える条件のいい職場へ頑張つて就職する。もしくは、もっと都会へ行くのかもしれない。

この町へ戻ってくる者はほとんどいなかった。

娯楽も少なく、若者が年々減つていくばかりで活気を失っているこの町に戻ってくるということは、高校生の彼らにとつては少なからず挫折を意味していた。ほとんどの若者が夢を持って両親と離れ、長年暮らした町を出て行つてしまふ。夢が叶わずとも一度都会に出て生活してしまうと何も無い不便なこの暮らしにはなかなか戻ってくることは困難と取れる。家によつては逆に折角いい学校を出たのだから、戻つて来るなど言いさえするのだそうだ。

都会の暮らしを満喫してしまうと自然に囲まれた平穏だけが取り柄の暮らしは刺激が足りないのであらうか。

海に面したこの町はかつて漁が盛んで活気に満ち溢れていた。加工品などもそのおいしさで有名であつたが、ある年を境に漁業量が減り、仕事を失つた者は職を求めて町を後にした。かつては観光でにぎわつていた街中も今では平日でも昼間は人通りがまばらで、土日もシャッターを下ろす店も少なくない状態になっていた。翔平が暮らす隣町では農業で生計を立てる人々がほとんどである。広い大地に覆われて育つてはいても、農家の子供も自立やネオン街を夢見て巣立つていく。この辺りの高齢化は確実に進んでいる。それは仕方無いことと残される大人も割り切つていた。でもいつかは戻つて来て欲しいとも願つていた。

彼らにとつても故郷を離れるのは寂しく、自分たちにとつてもこの町の行く末に対しても不安なことである。家族とも離れたくない。だが、それ以上にこれからの新しい生活に対する期待と好奇心がそれを上回っていた。

翔平は札幌市内の専門学校に合格していた。

兄の龍一が大学に通うため二年前に家を出ていた。龍一と今月末から一緒に少し大きめの家を借りて共同で暮らすのである。翔平はそのため、自分が受験する専門学校を選択する際、通いやすいようにこれから住むであろう土地も配慮に入れて決めていた。

「翔平君のお兄ちゃん、よく一緒に住むのOKしたよね。普通嫌がったりするんじゃない？」

まどかがストーブに火を着けながら尋ねた。翔平はまどかのベッドに腰掛けて部屋が暖まるのをじっと待つ。

「うーん、まあやっぱ最初は嫌がってたよ。でも今住んでる部屋が1DKで超狭いし、俺と住めば広くなつて物も沢山置けるようになって龍も快適になると思つたんじゃない？それに男兄弟な訳だし、ねーちゃんとか妹よりかは気楽だろ。」

まどかはコートをハンガーに掛ける。

「そんなに狭い家だったの？」

と、聞きながらハンガーを手にして翔平の着るコートに手を差し伸べた。だが翔平は脱ぐのを嫌がつて首を横に振り、また亀のようになつた。

「何回か泊まりに行ったことあるけどホントに狭いんだよ。俺が寝る用の布団敷いたら足の踏み場も無いって感じだな。元々龍は部屋も汚いし。」

「そっか、じゃあ、お掃除とかこれから大変なんじゃない？」

「絶対分担だよ！って言うか、そもそも親の仕送りで生活してるんだからあいつに拒否権なんか無いんだよ。本音を言えば俺だつて一

人暮らしの方がよかったよ。」

翔平が上半身だけベッドに横たわる。

「でもいいじゃない。なんかあっても安心だし、楽しそうで羨ましいよ。絶対に遊びに行くからね！咲ちゃんと一緒に。」

その瞬間に翔平の顔に笑みがこぼれる。

まどかはステレオのスイッチを押し、床に置いてある座椅子に横向きに座り、背もたれにひじをかけて頬杖をつきながらにやっとして翔平の方を向いた。

「最近どう？仲良くしてる？」

「おう。」

更にまどかはにやにやして

「メールは毎日してる？最近いつ会ったの？デートは何回くらいしたの？どこに遊びに行ったの？」

「おい！質問攻めかよ！！」

翔平は起き上がってまどかを見る。

「じゃあ俺だつて聞くぞ！お前はマサとどうなってるんだよ。最近連絡したのか？あれからどうなったんだよ。」

まどかは急に顔を下に向けた。その様子に、しまった！と翔平は思った。そしておそろおそろベッドから降りてまどかに近寄った。

「おい、大丈夫か？」

まどかは無反応である。翔平は励まそうとした。

「なあ、大丈夫だつて。そのうちいいことあるぞ。頑張れマド。」

翔平は精いっぱいの慰め声である。

するとまどかは小刻みに肩が揺れだしクックククと声が漏れた。

一瞬泣いているのかと思ったが顔を上げたまどかは予想通り笑っていた。

「うつふふふ。」

翔平は困惑した。

「なんだよその変な笑い方は……。心が折れただけじゃなくて頭までやられたか？」

まどかの目はちつとも悲しそうではなかった。

「え・・・？なんだ・・・？」

翔平は辺りを一瞬見回してはっとした。

「もしかして！」

まどかは大きく首を何度も縦に振り、まだ変な笑い方を続けている。

「うまくいったのかー！！マジでか！？おい！よかったな！すげーな！」

翔平が驚いて言った。

「え？いつから？ってか何で早く教えてくれなかったんだよ？さっきバスケする前に何で報告しなかったんだよ。ずるいぞお前！」

翔平がまどかの首を軽く絞めてゆらゆら揺らしだした。

まどかは首を絞められても笑顔である。

「だって聞かれなかったもんね。へへへ。」

「ム力つくなお前！！」

揺れが激しくなった。

「ぎゃー！！ははは！」

苦しみつつまだ笑うまどか。

「あれっ。」

翔平の動きが止まった。

「ん？」

流石に後半はちょっと締めがきつかったらしく、まどかは渋い顔を  
して翔平の手を払いのけて首に手を当てている。

「この曲はもしかして・・・。」

翔平が部屋に流れる音楽に耳を傾け始めた。そう言われた途端まど  
かは立ち上がった。

「気づいてしまいましたか。ゲホゲホ」

机の上に用意されていたCDのケースを手に取り、翔平に見せた。

「こないだ予約してたじゃない？今朝イチで電話が来たから即行  
で買いに行ったのよ。素敵でしょ。」

翔平は手渡されたケースとジャケットを食い入るように見ている。



まどかの大好きな男性五人組みのFirst FishというバンドのCDである。

「おおー！今回いいのばっか入ってんなー。」

「そうなのよ。午前中ずつと聴いてたわ。」

「聴き終わったら貸して。っていうか、ちょうだい。」

「言うと思った。ヤダね。」

笑い声で部屋は満たされていた。が、翔平は、はっとしたように携帯電話を上着のポケットから取り出した。

「メールチェックですか？」

まどかはまたにやにやして問いかけた。

翔平は普段より慎重に指を動かしている。

「あつ、咲からだ。ええと・・・今日の用事が早く終わった・・・よ・・・今から会えるけど今どこ・・・かと・・・。」

まどかはうなずいた。

「よし、咲ちゃんも家に呼びなよ。私も久々に会いたいし三人でゲームしようよって送ってみて。」

翔平もうなずいた。

「そうだな、マドは咲にも報告することがあるしな。」  
まどかは小さく微笑んだ。

コンコンとまどかの部屋をノックする。返事が無い。空けてみると部屋には誰もいない。おやつと少し考えていると奥のほうから笑い声が聞こえてくる。

声が漏れる方へ行きドアを開ける。

「なんだ、あんた達こっちにいたの！」

と、言ったのはお盆におやつと暖かいココアを三つ乗せているまどかの母の響子である。

「おばさんこんにちはー。」

翔平と咲が言う。

「こんにちは。」

と、便乗するまどか。

「お前の家だろ。」

つつこみを忘れない翔平。

響子は笑顔で会釈するとお盆をテーブルに置いた。

「翔平君と咲ちゃんはいつ頃向こうに行くの？家は決まったの？」

咲はココアを受け取った。

「あつ、ありがとうございます。ええと、私はお姉ちゃんが今住んでる家にそのまま住みます。姉は短大を卒業したんですけど、就職先が名古屋なんです。だから・・・」

「へえ、お姉さんが名古屋！」

響子は驚いた。驚くと目を大きく開けておちよぼ口になる。そういう癖なのである。

「はい。在学中に名古屋に旅行に行ったそうなんですけど、その時にすぐ名古屋が気に入ってそれであちらの企業に希望したみたいです。やりたい仕事もあってちょうど良かったって言っていました。」

「あらあ、世の中うまくできてるわね。じゃあ咲ちゃんは一人暮らしになっちゃうんだね。翔平君は？」

「僕は兄貴と一緒に住みます。行くのは入学のちよつと前位ですね。引越しは実はもう終わっちゃって全部ベッドも向こうに送っちゃったんですよ。だから今僕はお客様用の敷布団で寝てるんです。」

翔平はココアをすすする。

「ははは、あらあ、そうなの。そうか、あ、咲ちゃんも入学前位に行くの？」

響子は一部聞き忘れていたことに気づいて慌てて聞いた。

「はい、たぶんその辺ですね・・・。」

ふうつとため息をつき響子はお盆を胸に抱えた。

「みんな良かったねえ。同じ場所に行けて。」

「そうですね。だいたいは札幌ですからねえ。あ、でも・・・四組のゆりちゃんは釧路だし、五組のやつちは旭川。」

咲が指折り数えて言う。

「あと、みーちゃんは東京で、ボスは鹿児島。そうそう、謙吾くんは函館だ。あとは・・・」

「うわゝ遠いよなあ。でも他にもまだいるよな。」

翔平が割り込む。

「向こう言ってもまどかのことよろしく頼むね。この子おつちよこちよいだし心配でねえ。」

響子の言葉にまどかはおかしを食べながら

「それはお母さんの血です。」

と、やや憎まれ口をたたいた。その次の瞬間に開いたドアの横からひよっこり顔が出てきて低い男の声で

「僕もお母さんの血です。」

「ぎゃあ!!」

みんな響子の慌てぶりに大笑いである。後ろから現れたのはまどかの弟の浩輔だった。ちよつと気持ち悪い緑色の学校指定のジャージを着ている。

「また俺の部屋でゲームやってる。」

ズバズバと部屋に入ってきた。ここは浩輔の部屋だったのである。まどかの部屋にはゲームが無い。本体を配線しなおせばいいだけのことなのだが、浩輔の部屋の暖房がファンヒーターなので冬になつてからは翔平がこっちの部屋をいつも希望していた。まどかはファンヒーターの温風が好きではなかったので最初渋っていたが、寒いと言われたら仕方が無い。最も、暖房も移動する手もあるが、まどかは元来めんどくさがりであり、更に部屋を片付ける手間が省けるという理由で一人でゲームをする時も浩輔の部屋をしょっちゅう利用していた。温風は、片付けをしなくていいのなら我慢できる程度の存在のようだ。

「あんたびつくりしたでしょゝもうゝ。」

響子は情けない声を出して心臓の辺りを軽く押さえている。

「浩輔おかえり、部活は今日無かったの?」

笑って腹筋を押さえながらまどかが聞いた。

「今日の体育館はバレー部の日だから俺らは外練。」

そっけなく浩輔は答え、鞆を机の上にドカッと置いた。

「浩輔、俺と勝負するべ。今日は負けねえぞ。」

翔平にコントローラーを手渡された途端に浩輔はコロッと表情が変わった。

実は浩輔はそう言われるのを心待ちにしていたのである。何故なら姉のまどかでは弱くて相手にならず、たまに遊びにやって来る翔平とゲームをするのが楽しみだったのである。浩輔に比べると翔平はさほど上手くはないが、それでもまどかよりは手ごたえがある。まどかはそれがわかっていたので自分のコントローラーを翔平に渡した。ちよっとだけおもしろくなかったがかなわないのでしょうがない。

響子は部屋を出て行こうとしたが足を止めた。

「今日の晩御飯お鍋なんだけどみんな家でべて行かないかい？いい魚、河野さんからもらったのよ。おいしいぞ。みんなで食べるともつともつとおいしいぞ。」

響子は何やら企んだ風な顔で言った。河野さんとは近所に住むまどかの叔母の家で、旦那さんは漁師である。まどかの父が休日に時期になるとたまに海へ手伝いに行っていたので収穫の多い日には粹のいい魚を譲ってもらうことがあった。

「俺、家に電話してみます！」

さつと翔平が携帯を手にする。

「早っ！！あんた早すぎだよ！」

まどかが言う。

「あ、じゃあ私も・・・。」

おずおずと咲も鞆の中から携帯を取り出す。まどかと浩輔は二人の様子と響子のうれしそうな顔を眺めて目を合わせた。

「おう、みんな食べる！」

まどかの父の勲が土鍋の蓋を開けた。白い湯気がふわっと舞い上がり、食欲をそそる海の幸のすけそうだら、蟹、たっぷりの豆腐、そして山菜の混じった香りが部屋中を漂う。鍋の両脇には鮪、イカ、鮭の切り身がおいてあるが、ぐつぐつ煮える鍋の様子にみんな釘付けだ。

「あちちちち！」

勲は焦って土鍋の蓋を置き、右耳をつまんだ。

「いただきます！す！」

笑いながら元気良く言うと一緒に箸でつつき始める。今日の鍋は湯豆腐がメインの寄せ鍋だ。具を、左手に持ったたれの入った皿へ移動させ少しふうふうと冷まして口の中へほおばる。まだ熱々の具にはふはふと言いながら左手をご飯茶碗に持ち替えて、つやつやの炊き立てのお米をまた口に運ぶ。ご飯もまだ熱いので口が閉じられないながらも一生懸命噛んで飲み込む。

「うまーい！このたれがまたうまいですよ！」

翔平が唸る。

咲はグラスのオレンジジュースを飲んで口を冷やした。

「ほんと、すごいいいいですね。」

「このたれはうちのおふくろから受け継がれた母さんの手作りなんだぞ。うめえべ。みんな好きなだけ食べれよ。」

勲は既にほろ酔いで、朗らかに鍋を勧めた。まどかのはき古した紫色のジャージと、白い肌着のシャツを着た勲は具材をポンポン鍋に放る。勲は人に食べさせるのが好きだった。自分の家に来た者には腹を空かせたまま帰らせないという意識が昔からあったのだ。勲はこの町で生まれ育ち、一度も外の町で生活した経験は無い。七人兄弟の長男として妹や弟の世話をしながら学校に行き、家の手伝いをし、時にはもう亡くなった父の漁を手伝うこともあった。勲は漁師ではないが、幼い頃からの魚好きは健在で釣りに行くこともしばしばである。

「おい、これもういいぞ。」

勲が煮えた魚をとそれぞれの空の皿へ入れる。まどかと浩輔は汗をかきながら無言でひたすら食べていた。台所のほうから響子が器を持ってやってきた。

「白滝とくずきりもあるのよ。好みで入れて食べてちょうだい。あと、まどか、ちょっと手伝って。」

まどかは無言で口を手で押さえ、もぐもぐさせながら席を立てて台所へ向かう。勲は徳利の酒をおちよこに注ぎ、鮭の刺身をわさび醤油につけて食べた。

「うまい。母さん、これうまいわ。ほれ、みんなも食ってみ。」

そう言っておちよこに注いだ酒をぐいっと流し込んだ。まどかが戻って来た。手にはおしぼりが五つとハサミを三つ持っている。

「これ、蟹用ね。」

そう言つて配つたと思つたらまた自分のいた場所に戻り、鍋に具をせっせと入れている。勲はまた徳利を傾けたがおちよこに半分も行かない内に流れは止まってしまった。

「母さん、もう一本ちょうだい。」

勲は徳利を右手に持つて上に持ち上げて言つた。向かいに座っているまどかが無言で勲の徳利に手を伸ばし、また口をもぐもぐさせながら持ち去つて言つた。

「おおーマド働け。」

翔平が言つた。勲は笑つて翔平を顔を向けた。

「どうだ、うめえべ。札幌に行つても、たまに食べに帰つて来いよ。札幌なんか遠くねえ、車でビュツとすぐなんだし。おっちゃんいつでも待つてるぞ。」

「はい、また来ます。」

翔平はにつこり笑つて言つた。

「私も来ます。」

咲も続けた。

「ビュツとすぐつてことは無いだろ。」

浩輔がボソツと笑って言った。

「うるせえ、この！」

勲は浩輔に自分の使っている箸で頭をたたくような素振りをした。

翔平と咲はふふつと笑った。

「向こう行ったら俺らはそれぞれ学校だし、マドは仕事だし、あんまり時間は無いのかもしれないけど・・・でも、何だかんだできつと遊ぶよな。たまにこっちにも帰って来るし。」

「うん。そうだよねえ。すぐゴールデンウィークもあるし。」

翔平と咲が蟹の足をハサミで切りながら話す。

「んだ、でも勉強もしつかりやれよ。」

勲が酔ってる割には普通のことを言ったなと浩輔は思った。

「うん、蟹もなかなかうまいぞ。」

翔平は次の足を切るのに取り掛かる。

「この蟹は鍋のだしだからそうでもねえぞ。」

勲が言う。次の瞬間まどかは勲のお酒と空のボウルを持って戻って来た。続いて響子がまた何かをさっきよりも大きな器に入れて持ってきて来た。

「茹で立てだよ。この蟹は小樽のセイちゃんが送ってくれたやつだよ。」

響子は台所で蟹を茹でていたのである。

「あ、これ空入れね。」

まどかはさつと置いてまた自分の場所に戻る。響子がもうスペースの無いテーブルの上の皿を少しずつ寄せて蟹の入った器を置いた。

「うおー！でつけえ！」

翔平が思わず叫ぶ。ほくほくと湯気を出すほんのり赤い足に鋭い爪。勲は待つてましたと言わんばかりに自分の皿に蟹の足を乗せバキバキと折った。続いて浩輔、翔平も足をつかんだ。

「あつっ！！」

茹でたばかりの足は、触れ続けてはいられない位にまだ熱を持っていた。なんとか端の方を持ってはさみで切り込みを入れようとする

が、殻が厚くて切ることができない。勲を見ると素手で豪快に食べている。翔平は少しの間啞然としたが足の角度を変えるため持ち替えようとした。

「いてっ!!」

今度は浩輔が言う。足には幾つもの小さい突起と毛があり、ぎゅつと掴むとそれが指に刺さったり引つ掛かったりするのである。それぞれ悪戦苦闘しているが、勲だけは二本目を皿に乗せていた。

「ちくしょー。こいつめ!」

そんな中、咲は冷静に周りを見つめていた。

「この前のすき焼きもおいしかったし、夏に外でやったバーベキューもおいしかったです。でも今日はまたすごい豪勢ですね。」

響子はやっとな勲の隣の席に着いて、缶ビールを開けてグラスに注いでいた。

「うん、今日はね、みんなの壮行会みたいなもんだよ。いっぱい食べなさい。今日は花火はまだできないけどね。じゃ、遅れましたがビールいただきます。」

「ありがとうございます。かんぱい。」

翔平は烏龍茶の入ったグラスを持った。グラスを軽くぶつけ合つと、ゴクツゴクツとビールを飲み込んだ響子は甲高い声を出す。

「よし、みんな、今日は飲め。飲んでけ。」

勲が冷えた缶ビールを両手に持つて翔平と咲に渡そうとした。

「ちよっとお父さん、止めなさい!!」

響子が怒って言う。

「なんでだよ。今日はいいいじゃねえか。」

「ダメだ!! バカモノ!」

バシツと勲の足を叩く。

「いつてえ。」

響子と勲のやり取りに翔平と咲は笑っていた。まどかと浩輔は、また始まったという感じで少し呆れて見て、お互い目を合わせてうなずきながらも口はもぐもぐと噛み続けている。



「うん、そうだよ。蟹がうまかったって。今日は楽しかったんだよ。マサくんも来れたらよかったのに。」

濡れた髪にタオルを当ててパジャマ姿のまどかは自分の部屋で電話で話していた。まどかの部屋は女の子の割にはあまり物が置いていなく、殺風景だった。壁に唯一、パズルで出来た特大サイズのかわいらしい犬のキャラクターの絵が飾ってある以外はあまり可愛らしさが無い。そのパズルも自分で作った訳では無く、勲が完成したものをどこかからもらってきた物であったため、そんなに愛着は無かった。

「そっか、じゃあ次に会えるのは来週だね。」

まどかは椅子に腰掛けて机の上にあるパソコンの電源を入れた。

「うん、じゃあね。おやすみなさい。」

電話を机の端に置き、頭を下に下げてガシガシとタオルで湿った髪を拭き始めた。少しして手を止めてパソコンの横に置かれた生姜の入った紅茶をゴクゴクと飲み、ふーっとため息をつく。そしてマウスをカチカチと動かした。まどかが見ていたのは自分がもうじき入社する会社のホームページだった。ここのところ毎日のように同じ物を見ていた。ある程度見終わると電源を落とし、椅子から立ち上がると今度は座椅子に座り直しドライヤーで髪を乾かし始めた。まどかはくせつ毛だったので、完璧に乾かさないと気が済まなかった。そうしなければ次の日に髪にうねりが出てしまい、その日が一日憂鬱になってしまうのであった。

十分近く経ち乾かし終わると、バスタオルとドライヤーを脱衣所の方へ戻すために部屋を出て行く。そしてまた部屋に戻って来た。忙しい子である。机のほうの椅子へ座り、引き出しを引いて鍵を取り出し、右側の引き出しの鍵穴に差込み、開けると一冊のノートを取り出した。薄いグレー色の厚紙の表紙には約三ヶ月前の日付が書かれてある。ペラペラとめくり、昨日の日付に書かれた文章の下に空

白に今日の日付を書き足し、さらさらとペンを走らせた。

これから何が私を待っているのだろう・・・

まどかは中学生の頃から日記を時々書いていた。その日あった楽しいこと、悲しかったこと、不安なこと、思うままに気が済むまで書き綴っていた。そうすると悩んでいるときは不思議と気持ちが落ち着いてくる。恋愛に関する内容が大半を占めていたが、人間関係に悩むこともあり、ある時は気が付いたら10ページ近く書いていたこともあったりした。日記を書き始めた頃は薄っぺらなノートで充分であったが、高校、特に翔平と出会ってから、それでは足りなくなってきたのである。

まどかが翔平と初めてまともに言葉を交わしたのは高校二年の春である。それまではお互いに友達の友達として挨拶をする程度の距離であった。まどかは中学一年からずっとバスケット部に所属しており、翔平も隣の中学校のバスケット部だったため、練習試合や地区大会で顔を合わせているはずなのだが、お互いにそれは後から知った。同じ高校に進学し、まどかは多少迷ったがバスケットを続けた。翔平は続けなかった。生徒数が一学年約300人。クラスも違い、共通点も無い。翔平は少しかわいらしい顔をしており、口は悪いが優しい一面もあり、学年の女子の中のランク付けは平均よりやや上だった。そのためあまり噂話をしないまどかでも、顔と名前を覚えてしまうくらい友達の話の中から翔平の話題は自然と耳に入ってきた。だがそれは翔平だけに限ったことではなく、他の男子生徒に関してもそうである。

このように翔平は自覚していなかったが、女子に人気のある方ではあった。しかしそれは中途半端な物であり、翔平に特に親しい女の子というものも無く、翔平自身、過去に女子に馬鹿にされた経験があり、女は好かんと思っていた。男友達に連れられてクラスや他の女子の家に遊びに行くことは多少あったものの、さほど親しくな

ることは無かった。

一方まどかは恋多き一面を持っており、片思いをしても告白しないうちに相手に彼女ができたり、思い切って想いを伝えても届かなかったりと数人に対して独りよがりな恋を続けていた。しかし惚れっぽいので少しすると、ちよつとしたきっかけでまた新しい恋に身を焦がすのであった。逆に思いもよらず男子の方からお付き合いを申し込まれることもあったが、まどかには誰も好きではない期間というものが、中学一年の初恋以来ほとんど無かった。うまい具合に次から次へと片思いをしていた。ダメになりそうな予感がすると気持ちは一気に下降し、隣の席だったり、その時ちようどよく話す男の子にコロツと行ってしまう。好きな人がいて相手の自分に対する反応に一喜一憂したり、ウキウキと楽しい時に関係の無い人から告白されることほど邪魔なことは無い。まどかは罰当たりなことにそう思っていた。そんな訳で彼氏と呼べる存在はゼロであった。

二年になって間もないある朝に、まどかはいつもより一時間早く家を出た。学校の体育館で朝練をしようと思ったのだ。早起きが苦手なまどかは朝食をそこそこに自転車に乗る。そしてまず、毎朝必ず寄る駅の近くにある自動販売機を目指した。まどかの好きなドリンクがこの辺ではその自販機にしか無かったのだ。天気の良い朝で、道端の草木は朝露に濡れて太陽の光に反射してキラキラしていた。まどかは胸いっぱいに空気を吸い込んで口から吐き出した。

「今日はシューティングだな。」

まどかは最近のシュート率が中学の頃に比べて下がってきていることが気になっていた。まどかの高校のバスケット部の練習は厳しかった。地区での大会ではいつも上位で、道の大会にもよく出場していた。今年の夏も道の大会で、少しでも上に行くことを目指している。まどかはありがたいことに、一年生の頃から時々試合に出させてもらうことがあった。しかし、緊張によっていつもの調子が出なかったり、ミスをしてしまうことで落ち込んでいた。どうしたらいいかと考えていたところ、たまたま練習を見に来てくれた高校の〇

Gである先輩に個人練習を増やしてみてはどうかとアドバイスをもらったのだ。全体練習ももちろん大切だが、個人練習が以前に比べて足りない。そう気付くことができ、朝の時間を使って少しでも役に立てるように上手くなりたいとまどかは思った。

「よし、頑張るか！」

そう言う歌を歌いだした。短い髪をなびかせて自転車をぐんぐん漕ぐ。そして自動販売機の前まで来た時にボールの弾む音が公園の方から聞こえてきた。

（こんな時間に遊んでる子供が・・・？）

疑問に思いつつまどかは千円札を入れてスポーツドリンクを二本買った。朝練用と、放課後用である。ドリンクとおつりの小銭を取るためにしゃがみ込んだ。財布に小銭を入れながらボールの音を聴いていると、ダダダツと早い足音と同じくボールの弾む音がした。

（子供ではないな・・・）

まどかは気になって、籠の中の鞆の上に手に持っていた物を乱暴に置く。自転車の方向を変えて、音のする方へゆっくり行ってみた。木の間からそつと覗くと、まどかと同じ学校の制服を着た男子生徒がバスケットゴールに向かってドリブルをしていた。それが翔平だった。まどかは驚いた。毎日のように練習で見ている男子の先輩のドリブルテクニクよりも細かく、早く、低いドリブルだった。

「わ、うまい・・・。」

まどかはつぶやいた。少しの間その場から動けなかった。

数分経つてはつとしたまどかは、自転車をその場に置いてゆっくりとバスケットゴールの方へ近付き、翔平に声を掛けたのである。

「ねえ、ジュース飲む？」

## 第二話・友達の始まり（前書き）

高校を卒業し、今まで暮らした町から離れるまどか。それまでの高校生活の前半です。

## 第二話・友達の始まり

まどかは一見おとなしい雰囲気があるが、好奇心旺盛で好きなことに対しては積極的。しかし、恋に対しては少々弱気な一面もあった。高校一年の終わり頃、まどかは隣の席の男の子が気になっていた。向島秋生という双子の兄弟の兄の方で背が高く、はつきりした眉毛に大きな瞳、短髪がさわやかな野球児である。ジョークが好きな彼は休み時間は友人らといつもゲラゲラと声高々に笑い、授業中も教壇に立つ教師に頻繁に質問を投げかけ、授業を脱線させたり、漫才をしてるかのような愉快なやりとりをよくしていてクラスの全員がそれを楽しんでいた。入学してすぐの頃は秋生に対し、うるさい人だとまどかは思っていた。しかし嫌でも毎日聞かされる。段々と話の内容に吹き出すようになり、秋生の性格を理解していき夏休み前にはまどかは毎日笑えるようになっていた。秋生は場を明るくにぎやかに盛り上げる人気者でみんなから「アキちゃん」「アキくん」と呼ばれ、女子達の人気格付けランクはB。ランクは順番に良いとされる者に上から順にA B C となっているようだ。Dは平凡らしい。残念ながら対象外の者達にはランクが無いようだ。

まどかが隣の席に座っていた時、秋生に彼女はいなかった。まどかは二年のクラス替えの前になんとか秋生と今より仲良くなって携帯のメールアドレスを交換したいと思っていた。何度か教えてもらおうと話しかけてみても、彼はいつもおかしいことばかり言うので話がちつとも先に進まなかった。

（たった一言なのにどうしてスパッと聞けないのかな・・・何とも思っていない人には気軽に言えるようなことなのに。）

考える度に秋生への気持ちが深いような気がしてならないまどか。そして結局聞けないままに春休みに入ってしまった、夜になると毎日のように

また同じクラスになれますように！

そう日記に書いていた。携帯電話は高校の入学祝いとして両親に与えられた。しかし当時まだクラスの半分も携帯電話を持つていない者はいなかった。家からかかってくる電話が主で、登録されている友達の携帯番号は初めの頃は十数件だけだった。だが日が経つに連れてクラスの携帯人口は増え、まどかが秋生と隣の席になる少し前に秋生もやっとな願だったらしい携帯を手にし、クラス中に見せびらかしていた。秋生と仲のいい女子がアドレス交換しているのをまどかは遠くでいいなあと思っで見ている。それは秋生に対する自分の気持ちに気付く最初の出来事でもあった。

新学期、結局クラスは離れてしまった。まどかは落ち込んだ。秋生のいない教室には、違和感と寂しさの混ざったような静けさがあった。恐らくそう思っているのは自分だけなのであるうと思っった。新しい自分の机に鞆を置き、椅子に座り、まだ一枚も張り紙がされていない殺風景な教室を見回す。次々に教室に入ってくる人達は不安げな面持ちをしているが、親しいらしい友人を見つけると強張った顔が緩む。その様子を見ていたまどか。

（折角の新学期なんだから暗い顔をしてちゃダメだ。）

そう言い聞かせて、新しい仲間と挨拶をするために明るく振る舞った。狭い町なのでほとんどの子は顔見知りだった。遠くから通って来ている人は少数。卒業まではこのクラスで過ごすのだ。

（新しい教室、新しい教科書、新しい仲間、先生。気持ちを入れ替えてまた楽しく過ごしたい。始めが肝心！）

そして次の休み時間にはまどかは秋生のいるクラスに偵察に行っていた。まだ新しい教室に馴染めなためだろうか、女の子の多くは、以前の級友に会いに行っていた。まどかはそれに紛れていた。恥ずかしくて勇気が無いため秋生本人に話しかけには行かない。そのクラスにいる友人に用事があると見せ掛けて、遠くから秋生の様子を見ようと思っただのである。特に意識して見なくても相変わらず大き

な声でギャグを言って笑っている秋生。存在感は前と少しも変わらない。

（クラスが新しくなったのに・・・少しは緊張とか、様子を見るとか、そういうのは無いのかしら・・・。）

そう思いながら友人と話しつつ教室を見回す振りをして、人と人の間から秋生の姿を見る。

（元気なら何よりだけど、でもやっぱり寂しいな。でもしょうがない、また見に来よう。）

帰りがけにまたチラッと秋生の方を見た。その日から秋生の隣には翔平がいるようになっていた。

「だ〜か〜ら〜、しっつこいな〜。俺は、高校では部活はやらなくて決めるんだよ。」

だるそうに嫌そうな声を出しているが顔は少しも嫌そうでない。だらつとしたワイシャツにあえて緩められているネクタイ。手には化学の教科書にノート、ペンケース。ズボンの後ろのポケットからはアヒルの携帯ストラップが垂れていて、翔平がスタスタ歩くのと同じ時に左右に揺れている。髪の毛はワックスで今時のヘアスタイルに保たれていて、自然体というよりは、何だかちよつとかっこつけてるような感じに見える。さわやかスポーツ少年とは言い難い。

「だからなんでなの？あんなに上手いのもつたないよ。宮本君がチームにいたら男バスは今よりもっと上に行けるだろうし、試合に勝つのは楽しいことだよ。みんなですれを分かち合ったりさ・・・。それってもっと楽しいことでしょ。そうでしょ？」

後ろから追いかけるまどか。少し間をおいて翔平がめんどくさそうに答えた。

「俺なんかいなくなつて、あの人達なら充分上まで行けんだろ。」  
「でも・・・。」

まどかが言いかけた時に始業のベルが鳴り出した。



「あーやべー遅れる。じゃあな。」

そう言つて翔平は走り出した。まどかはその場に残され納得がいかない顔をしていた。まどかはこの前の朝に見たバスケットをしている翔平の姿と、その後の翔平の言う言葉がずっと釣り合わないと感じていた。一週間前に翔平に話し掛けてからまどかは翔平に毎日のようにバスケット部に今からでも入るように言っていた。翔平のいる教室に行つて秋生を意識しつつ声を掛けてみたり、廊下で見かけた時に。でも翔平の答えはいつもノー。理由を覚えてくれないのだ。まどかはそれが何故なのか、どうしてなのか、ずっと気になっていた。まどかは小学生のミニバスからずっとバスケットを続けていた。最初は近所の友達に付き添つて見学に行っただけだったが、その日初めてボールに触り、何度も高く放つてゴールのネットに入れることができた瞬間からバスケットが好きになつてしまった。それから少しずつ上達し、中学でバスケット部に入部した時は毎日のように練習できるようになつてすごく嬉しかった。練習は辛くて厳しい。でも試合に勝つてしまえばまた頑張ろうと思える。仲間と頑張つて達成することが何より楽しいのだ。なのにあんなに上手な翔平が部活も入らず一人で趣味のようにバスケットをしている理由がまどかにはわからなかった。翔平の力量も可能性も翔平自身の生活ももつたいないと思つたのだ。

「おい、何やつてんだ。授業始まるぞー。」

振り返ると他の教室の先生がまどかに気付いて遠くから呼んでくれていた。

「あつ！すいません！！・・・マズイ。」

慌てて自分の教室へ戻る。ガラッと教室のドアを開けると室内には誰もいなかった。

「えっ！？」

何事かと思い辺りを見回す。

「あれ?!」

時間割の方に目をやると次の時間はまどかのクラスも移動教室だつ

たのである。すっかり忘れていたのだ。

「あゝしまったゝ!!」

大慌てで準備して電気を消して教室を出た。少し走ったが廊下に響く自分の足音が大きく、他の授業中の人達に申し訳無いと思い、途中からは逆にゆっくり歩き出した。それに、もう先生に怒られるのはわかつている。焦つてもしょうがない。そう思つたのだ。まどかはマイペースな性格であつた。そしてどうしたら翔平をバスケット部に入部させられるのかを考えた。

（まずはやっぱり、どうして嫌なのか理由を聞かなきゃ。大きなお世話かもしれないけど同じバスケットをする者としてほつとくのはもつたないもんね。）

階段を上りあれこれ考える。そして教室に着いたまどかは先生に対する遅れた言い訳を用意し勢い良くドアを開けた。

「すいません、遅れました。」

そう言つた次の瞬間、時が止まつたかのように辺りはしんと静まり返り、中にいた全員がまどかをおかしな物を見るような目で見ていて、先程まで軽快に授業の説明をしていた先生までが静止してこちらを見ていた。どうしたんだろうかとまどかは思った。だが、その中にさつきまで話をしていたはずの翔平が窓側の席でポカンと口を開けたままで見つけ、まどかは異変に気付いた。

「あ。。。」

一瞬にして顔が熱くなり、ものすごく焦つた表情で次の動きに移ろうとしたが、時既に遅し、

「小野寺さん。。。ここは今、五組の授業中で、君は確か八組じゃ。。。」

化学の先生が半ば吹き出しそうに言う。

「おい小野寺、何やってんだよ。朝飯食つて来なかつたのかよ。つていうか！もしかして俺に会いに来たのか。ここに座れよ。」  
そう言つて自分の隣を指差しているのは秋生だった。教室内がザワザワとし始め、クスクス笑う者もいた。

「すつ、すいません！間違えました！！」

そう言つてさつきよりも勢い良くドアを閉め、恥ずかしさで涙目になりながら猛ダッシュで美術室に走った。まどかは間違つて実験室に来てしまつていたのだ。翔平と話していた時に見た化学の教科書が無意識にここへと足を運ばせてしまつたのである。実験室にいた生徒達はなんだつたんだ？と不思議顔である。先生は少し笑いを取つてすつきりと授業を再開したのだ。だが、何となくまどかがここへ来た理由がわかつてしまった翔平は一人で声を押し殺して涙を浮かべ、プルプルと肩を震わせて笑っていた。

「あいつアホだ・・・。」

翔平はしばらく窓の外に顔を向け笑っていた。

次の日の夜、夕食を終えて居間のソファに深々と座りテレビを見る翔平。宿題をしようか、それとも風呂に入つてしまおうか考をえていた。それから二階の自分の部屋に行き、宿題に取り掛かろうと机のライトを点けた時に部屋のドアをノックする音がした。母親がドアを開け入ってきた。

「電話だよ。」

電話の子機を渡された。

「誰？」

翔平の母は首を傾げて部屋を出て行つた。翔平は緊張した。友達なら携帯に連絡してくるはずだ。母の表情もいつもと少し違った。

（一体誰が・・・？）

上半身を前かがみに恐る恐る子機を耳に当てた。

「・・・もしもし？」

間髪入れずに女の声が出た。

「こんばんはー！小野寺ですー！」

翔平の不安な様子とは裏腹に元気で大きな声で深刻さのかけらもない。

「は？小野寺って・・・？誰？」

「えーひどい！！私の名前知らなかったの？最近よく話してたのに！最初に聞いてくれればいいのに。」

声でこの電話の相手が誰なのかわかった。

「なんだー、バスケ部の人か。」

翔平はまどかのことをバスケ部の人と呼んでいた。

「突然ごめんね。びつくりした？」

翔平は背もたれにもたれ掛かった。

「したよー！！なんだよ、どうやって家の電話番号を」

最後まで言い切らないうちに

「うん、電話帳で調べたの。宮本さんってこの辺はあんまりいないからすぐわかったよ。」

少し間が空く。

「電話帳！？・・・あれっ、でも・・・確か、この辺りでも10件以上はいるはずだけど。」

「そうなんだけど、一軒ずつかけたらいずれたどり着けるかなーって思っで電話帳の上からかけてみたのさ。でもねー、最初にかけた宮本一郎さんに翔平君いますか？って聞いたら翔平の家はここだよって教えてくれたの。親切な人でラッキー。すぐわかつちやったふふふ。」

楽しそうに笑う声が聞こえた。

「宮本一郎って！それ、俺の伯父さんの家だよ。お前マジか！？」

「あ、そうだったんだー。じゃあ電話で教えてくれたのは伯母さんかな。女の人だったから。」

ケロッと答えられた。あまりの予想外の話しに翔平は言葉が見つからない。

（この女は伯父の家に電話をかけている。なんてヤツだ！そして伯母が出た。俺のことを好きな女の子だと絶対に思われたはずだ！そして伯母は、伯父や従弟にも言いふらすだろう。あの家の人達の性格からするとそのうち俺はからかわれてしまう。）

そう思った。

「お・お前、なんてことしてくれたんだよ！今度会った時に何言われるかわかんねーじゃん。しかもさっきうちの親もなんか変だったし。」

「ご心配なく。伯母さんには授業の合同研究のことで至急聞きたいことがあったのでって言うといいたから。」

また間が空いた。

「え？ホントに？」

「はい。」

それを聞いた翔平はすっかり安心した。安堵の息が漏れた。しかしまどかに対する敵意はさほど変わらない。しかしまだ知り合ったばかり。あまり傷つけるようなことも言いたくない。

「お前、おもしろいヤツだな。」

かろつじてそう言えた。

「うん、ありがと。」

「俺は褒めてないぞ。馬鹿にしたんだ。」

翔平は半ばあきれていた。そしてその時にはだいぶ冷静になっていた。

「私にとっておもしろいは褒め言葉なんです。」

「あつそ。反抗的なヤツだな。で、電話なんかしてきてどうしたんだよ・・・何の用・・・あつ！そうだ。お前昨日さ・・・」

実験室で見たまどかを思い出して吹き出した。

「昨日？あつ、昨日のことは！あれは、ちよつとした間違いで・・・。」

翔平は大きな声で笑った。まどかの慌てた話し方がより鮮明に昨日の失態の場面を蘇らせた。更に昨日、笑いたくても笑えずに苦しかった分を吐き出すようにお腹の底から笑った。

「ふふふ。」

まどかもつられて笑った。

「あの後遅れて美術室行っただけ、私があまりにも情けない顔

をしてたみたいで先生に怒られるどころか逆に心配されちゃってさ。結構遅れたから怒られちゃうかなーって最初思ってたんだけど私もそれどころじゃなくて、やっぱ作られた話よりも真実って見た目で伝わるもののかな。」

「美術！？あつ、そういえばお前スケッチブック持ってたよな！なのになんで来ちゃったんだよ！アホだー。ありえねー。」

しばらくこの話で翔平は笑い続けた。一階にいた翔平の母にまで笑い声は聞こえていた。すつきりするまで笑った翔平は涙を拭いた。

「あーあ。で、なんで電話してきたんだっけ？」

最初あれだけ軽快にしゃべっていたまどかだが、電話をかける前はやはり緊張していた。男の子に電話をかけるのは初めてではない。でも最初にかけるのはいつも勇気が入った。その相手が好きな人であれば尚更。そうでない相手でもいきなり電話すると普段とは違う日常に入り込んだような気持ちになったからだ。翔平に電話をかけた理由は、その昨日の失態で五組の人達や、特に秋生に馬鹿にされるのではと思い、近寄りたくなかったから。昨日の今日では今の翔平のように笑いにされるのは避けられない。だが少し経ったら忘れられるとは思った。だが、内容はいつもの話。翔平のあまり話したくないみたいな雰囲気には気付いていた。だが、だからこそささと聞いてしまおうと思ったのだ。電話ならもしかしたら話してくれるかもしれない。何か言いたくない訳があるんだろうと思った。まどかにはいつもとは違う緊張があった。だが煙たがられるどころか、こんなに笑いにされ自分でもそれが楽しくなつて、なんだか打ち解けられたような感じになりすっかり緊張は解けていた。昨日の出来事は恥ずかしかったが、今それが役に立ったような気がして良かったと、まどかは思った。そして本題に入れると思った。

「うん、あのさ、宮本君で」

言いかけた時に翔平は割り込んだ

「あつ、もしかして告白か？俺に惚れちゃった！？」

「えっ！？ちょ、ち、違います。」

話はまた逸れたうえ、そんなこと言われると思っただけなまどかはびっくりしてしまい、どもって答えてしまった。

「えー、ホントにいい？」

「ホントに違います。そんなんじゃないありません。」

まどかはそう言っただけ呼吸を整えた。

「ふーん。」

「・・・ちよつと、信じてないでしょ。ホントに違うよ！」

「ほんとかなあ。」

（こいつ・・・自信過剰な勘違い男なのかな。・・・ちゃんとわからせないとうるさそうだな。）

「あのね・・・私には一応他にちゃんと好きな人はいる・・・ので。」  
ゆっくりと話す。好きな人という単語を言うと同時に秋生の顔が浮かんで恥ずかしくなった。

「へー、彼氏いるんだ。」

「いやっ！違うー！付き合っていない！・・・片思いで・・・。」

語尾の方の音が小さくなった。

「ふーん。じゃあ、好きな人って誰？」

「は？！」

まどかは焦りだした。そしてマズイと思った。

「誰？」

「そ、そんなの教える訳ないよ！何言ってるの。」

「でも最近お前は俺に質問ばかりしてきてたよな。だから俺にも質問させる。」

「いや、ちよつとそういうのはやってない・・・。」

まどかは慌てて答えたが翔平は独り言を始めてしまった。

「俺さーこないだ朝に会った時にさ、あんたのことどっかで見たと思っただよな。どこだっけ・・・。」

まどかはこの時電話をかけたことを激しく後悔していた。

（何故こんなことに・・・違うこと言えばよかった。何を馬鹿正直に答えてんの私。この人きつと私をはめようとして「告白か？」な

んて聞いてきたんだわ・・話もそらされてるし・・・やられた。」  
電話の向こうで苦悩するまどかを他所に、考え込む翔平。

「制服だったな・・何か見てたような・・あ！そうだ！俺の教室だ。最近よく来てるよな。」

ビクツとするまどか。すっかり受話器は汗ばんでいた。

「んでさ・・あんまり気にしてなかったけど、うちのクラスとか他にもそうだけど、そこに顔出すヤツって大体、前に同じクラスとか同中で友達だったっていう感じだよな。でもあんたがいつも話しに来てる人って石橋さんだよな。よくよく考えると不思議かもな。」

「石橋智子は小学校が一緒に家も近いのよ。それが何か不思議？」  
そう言ったすぐ後に、まどかは嫌な予感がして緩やかに心臓の鼓動が早くなっていく。

「俺、一年の時石橋さんと同じクラスだったけど、その時あんたの姿見た覚えほとんどないんだよね。」

まどかはギクツとした。確かに一年の時に石橋智子の教室には特に用事がない限り行っただけじゃなかった。二年になって秋生と石橋智子と同じクラスになったのをいいことに、石橋智子の所に行っただけは秋生を遠くから見ていた。

「へ、へえ・・同じクラスだったの？それは知らなかったよ。」  
どもりながら答えた。

「ふ・ん。なるほどね。うちのクラスのヤツか。」

翌朝、教室で朝礼を終えたまどかはぐったりして机にふせっていた。  
「まどか、朝練で疲れちゃったの？頑張ってるね。」

隣の席に座っている本田咲が気付いて声を掛けてきた。咲は中学の時に一度同じクラスになったことのある子で、ぽっちゃりとかわいらしい顔をしていて、優しくて成績も良く女の子らしい。男子からの人気も厚い。まどかとは対称的だ。以前はそんなに話さなかったが、二年になってすぐの席替えで隣になったためよく話せる友達に



なっていた。

「うん、まあね・・・」

まどかは顔を上げ弱々しく答えた。

「なんか顔色悪いみたい。あまり無理しないでね。」

「・・・ありがとう・・・咲ちゃん・・・」

咲が天使に見えた。顔がほころぶ。

昨夜、まどかは翔平に尋問され続け、最終的に相手を教えるまで電話を切らせてもらえなかった。そして更に延々とそのことについて質問され続けた。秋生は翔平の友達だ。翔平にとってこの話題はおもしろくてしょうがなかったのであろう。まどかが答えなければ秋生にこのことを言うなどと言い、根掘り葉掘り聞かれたのだ。まどかの聞きたかったことは何一つ聞くことすらできなかった。電話を切った時にはもう１１時を回っていた。そこで既に疲れきっていたのだが宿題を思い出した。普段なら宿題はせずに寝ただろう。しかも大嫌いな数学だ。しかし今回の宿題の内の一問は予めまどかに当てられていて翌日黒板にその回答を書くことになってる。やらないわけにはいかない。わからないながらもなんとか終えた。だが、宿題を解いている間中、翔平の理不尽な電話の内容に悔しさがこみ上げていて寝付くことができないと思ったまどかはその後日記に殴り書きをしたのだった。眠りについたのは深夜二時。勿論寝坊して、朝練どころかごはんも食べられずに急いで出てきたのだ。

（秋生くんのこととはまだ誰にも秘密だったのに・・・。しかも何であんなヤツに一番に知られなきやいけないのよ・・・。それにあの人はいつつも秋生君の隣りにいる。羨ましい・・・。）

まどかは大きなため息をついた。

（でも！いつばらされてもおかしくない状況だわ！私は弱みを握られたんだ。）

また机に突っ伏した。翔平に敵意を抱いた。日記に書いたおかげでだいぶ落ち着いていたが思い出す度に悔しかった。まどかは好きな人ができても信用できる人にしか打ち明けることは無かった。以前

友達に話してクラス中に広まって、冷やかされ、意中の人に無視されたことがあったからだ。なのに今回は思いがけず翔平にばれてしまった。本来なら大切な人にしか教えない大事な秘密。それを、勝手に取り上げられ好き勝手にいじくり回されたような気分だった。過去の冷やかしを思い出す。

（もう宮本君には話しかけないでおこう。）  
そう思っていた。

始業ベルが鳴り、その日最初の授業が始まった。まどかは頭を上げ、机から数学の教科書を出そうとした。しかし教科書もノートも無い。それどころかペンケースも見つからない。まどかは凍りついた。頭が一瞬真っ白になり、少しずつ冷静に記憶を辿る。

（ええと、昨日宿題が終わってノートを閉じた。それから日記を書いて机にしまった。そのまま寝た。）

と、いうことを一瞬で回想できた。が、寝坊したために、そのまま自宅の机に置きっぱなしであるという恐ろしい事態に気付いたのだ。（ギャー！まずい！）

まどかは冷静さを保つのが精一杯だった。

（いや、でもまだきつと大丈夫！この先生は話好きだからいつも授業の最初に昨日の出来事とか今日の所感を述べるはず！その間にやれば・・・）

慌てて咲に教科書を借りようとした。

「えー、では今日はまず昨日当てておいた宿題を解いてもらいましょうかね。今日の一番はー、小野寺さん。黒板にお願いします。」  
まどかはまたもや凍りついた。

その日の放課後、まどかはふらふらと教室を出て体育館に向かった。（今日はついてない……。いや、ここのことについてない……。）

数日前の実験室での教室間違い、翔平の誘導尋問、そして今朝の寝

坊に数学の授業。もともとまどかはドジな子ではあったが、こんなにも短期間に失敗が続くのは初めてだった。特に昨夜から今日にかけては最悪であった。そして全てのことに翔平が絡んでいる。

（あの人は悪魔よ。もう絶対関わらないようにしなきゃ。でも最初に話しかけたのは私だわ。しばらくおとなしくしてなさいっていう神様のお告げかもしれない。）

たまにまどかの中に神様という存在が現れる。

（でも神様なんてホントにいるのかな？）

わからないながら、いつも神に祈ったりしていた。

ざわざわとした校内、友達同士でおしゃべりしながら歩く女の子達、教室の隅で机を挟んで親しげに話す男女に目をやりながら歩いた。まどか放課後はほぼ毎日部活をして過ごしていた。体育館が使えない日も、外を走ったり筋トレをしたりと別メニューが用意されていた。常にバスケットの上達のために時間を費やし体を鍛えていた。それが当たり前ではあったが、たまに私の青春はこれでいいのだろうか？と疑問を持つこともやっぱあった。

階段を下りきったところでまどかの体は突然後ろに引っ張られた。

「わっ！」

驚いてふらつき、後ろを見るとその人はまどかの鞆を掴んでいた。

秋生だった。まどかは更に驚いた。

「わりーな。まあ怒るなよ。」

「いや、別に・・・怒ってないけど。」

何が何だかわからないが、久しぶりに秋生と話せて嬉しいのと緊張とで慌てるまどか。

「今日、野球部練習休みなんだぜー！」

秋生は嬉しそうだった。

「そうなんだ。めずらしいね。」

「ダイケに男の子が産まれたんだってよ。」

「えー、そうなんだ！すごいね！今日だったんだ。」

ダイケとは野球部顧問の池田のことで、もうすぐパパになるとい

う噂はまどかも知っていた。そのことについて驚きはしたものの、それでも少し声が裏返る。

「だから今日は記念日で部活も休みだ！やったぜ！」

秋生はお尻を横に突き出し変なポーズを取った。

「それで自慢したかったのね。」

（特に私に用があつた訳ではないんだから、たまたま通りがかっただけのことなだから、動揺しない！）

マインドコントロールをしつつ、秋生を見上げる。

「小野寺は練習か。ま、頑張れよ。」

「あ、うん。ありがと。」

「じゃあ、これやるからな。」

そう言われて飴の包み紙のような物を渡された。

「じゃーなー。」

渡すと同時にズカズカと歩き出す秋生。

「あ、バイバイ。」

そう言いながらぐしゃぐしゃの紙の隙間に何か書かれていることに気付きよく見てみた。

「ん？俺様のギャグ当番？何これ・・・あつ！」

紙を広げて見てみると、そこには携帯の番号とアドレスらしきものが汚い字で書かれていた。

「嘘・・・これって・・・」

その時、翔平がバタバタと階段を下りて来た。

「小野寺さん、ちーっす！」

驚いて反射的に紙を隠すまどかの横を、歯を出して笑いVサインをしながら通り過ぎ、翔平は秋生の後を追った。まどかは翔平に対して何も反応ができなかった。だが、この手元にある紙は秋生の物で、ここに書かれているのは秋生の連絡先で、これがまどかの手元に渡るように翔平がきつと何かをしたのだということはわかった。それは、それまではまどかに対していつも気だるそうにめんどくさそうにいつも言葉を選んでいるかのように話していた翔平が、わざとら

しいとも思えるような笑顔を見せたことでそう思えた。それに昨夜、翔平に聞かれたのだ。秋生のどこがいいと思ったのか、いつ頃から好きだと思うようになったのか、電話したりしたことがあるのか、遊んだことはあるのか・・・。

聞かれている間は興味本位に尋問されているようで苦痛だった。しかし、この時まどかはそうではなかったのかもしれないと思えた。今手に握っている、ゴミと見間違えてしまいそうな紙は今のまどかにとって最も欲しかった物で、それを与えてくれた翔平という存在の位置付けがまどかの中で大きく変わった。家に帰ると早速手を震わせながら何度も訂正しながらやっとまとだと思える文章を作り、秋生に初めてメールした。返事がなかなか返ってこない。じわじわと待って、待って、やっと返事が来た。

（ギャー！！やったー！！）

まどかは心の中で叫んだ。両手を上に上げて万歳した。そしてこの喜びを誰かに伝えたいと思った。そしてその夜も、まどかは翔平の家に電話をかけた。

それ以来、まどかは翔平に頻繁に連絡をするようになった。初日の一度きりだと思われたが、家にいる時はだいたい翔平の家の電話に連絡し、出先では携帯のメールを使った。秋生の相談。家の話。友達のこと。バスケットについて。マイブーム、音楽。女同士のように話は尽きなかった。学校でも時間があればよく話した。まどかは翔平に対して何でも話した。翔平もまどかを变だけど話せるいいヤツと思っていた。何よりおもしろいヤツだと。わずか数ヶ月で急激に親しくなったために、周りの友人はもちろん、学年中の誰もが二人はつきあっているのだと思っていた。勘違いされて、否定はするが、仲の良さは変わらなかった。

まどかは秋生にはまだ気持ち伝えようという段階ではなかった。まずは友達になってお互いのことを少しずつ知ってそれから・・・

と考えていたので頻繁には連絡はしなかった。本当は毎日でもしたい気持ちだった。しかし変に勘ぐられるのではということをおそれ、微妙な距離を保っていた。変なことを聞いて嫌われたくない、おかしなヤツだと思われたくない、そういう気持ちで常にあり、秋生にメールをする時はいつも緊張していた。電話をかけることは無かった。だが、翔平には暇さえあれば連絡していた。今日こんなことを秋生に言われた、秋生が学校でお菓子をくれた、CDを貸してくれた、など何かあると逐一翔平に報告をした。そして翔平はそれに対し、よかったな、よくやった、などと褒めてやり、まどかはその言葉にいつも安心した。

そんなある日まどかにとって辛い出来事が起こった。

事の起こりは七月の七夕の頃、町内のお祭りの二日目の夜のことだった。まどかはバスケットの練習を終えた後に猛スピードで家に帰り、急いでシャワーを浴びた。ドライヤーで一生懸命くせの強い髪を乾かし、慣れない手付きで髪を結う。そして買ったばかりの洋服を袋から出して着た。それは露出気味の派手な飾りの付いた物であった。それからほとんどしたことのない化粧もした。リップを塗った後、姿見に映った自分を見たまどかは興奮して飛び跳ねた。

その夜、一緒に縁日を回る約束をしていた咲と翔平とそして秋生。翔平の計らいでまどかは秋生と一緒に縁日を回れることになっていた。持つべきものは友達だと思い、翔平に強く感謝した。と、言っても二人きりではなく、翔平もいた。三人では不自然なのでまどかが咲も誘って四人でということになっていた。まずは神社の近くの古ぼけた商店の前で咲と落ち合った。毎年変わらない露店の並ぶ順番、一番手前から花やサボテンやめずらしい植木を飾った出店に、綿飴、たこ焼き、焼きそば、フルーツ飴、お面、金魚すくい……。広場にはお化け屋敷とオートバイショーなどの催し。毎年変わらない。雰囲気も出店も。まどかは毎年祭りを楽しみにしていた。どこまでも続きそうな左右に続く夜店の灯りの間の道を幼い頃は父、勲の肩車で通った。少し高い位置から一気に坂道を下ると鳥居がある。

星が点々と輝く空の下、甘い匂いや香ばしく食欲をそそる匂いに囲まれて夜店を回るのが大好きで、帰りたくないと言って両親を困らせた。まどかは人込みは嫌いだったがお祭りの人込みは大好きだった。すれ違う人は皆、一年に一度のお祭りを家族だったり、友達だったり、恋人だったり、大切な誰かと特別な時間を過ごしている。その楽しそうに笑顔で歩いている見知らぬ人を見ているとまどかもワクワクと楽しくなった。そして思春期から去年までは、恋人同士で歩く人達がとても羨ましいと思うようになった。

いつか自分も好きな誰かと一緒に手をつないで歩いてみたいな。

毎年この時期になると日記にそう記されていた。そして今年やっと手はつなげないながらもまどかはお祭りを家族でも友達でもない、好きな人と一緒に歩けるという初めての日が来た。好きな人と学校の外のプライベートで会うということ自体が初めてのことだった。まどかは四人で縁日を回れるという、秋生の了解をもらえたと翔平から聞いた時からずっとこの日が来るのが楽しみで、格好はどうしよう、どんな会話をしよう、並んで歩けるかな、など毎日のように模索して授業中もニヤニヤしていた。

翔平と秋生が待っているはずの鳥居の近くまで来た。まどかの心臓の鼓動は鳥居に近付くと共に高鳴った。周りの音や会話が聞こえなくなる位にまどかは緊張していた。だが、鳥居にはまだ二人は来ていなかった。しばらく待ったが、おながが空いていた咲は我慢できなかったのか焼きそばを買ってくると言ってまどかをその場に残して行ってしまった。まどかは部活の練習後はいつもおなかを空かせて家に帰っていたが、この日は少しも空腹感など無かった。だが一人残され少し落ち着いて神社のある方の階段を登る人の群れをまどかは眺めた。

（そういえば、学校から帰る時、まだ野球部の人何人がグラウンドにいたなあ。秋生君もその中にいたのかなあ。遅れてるのはその

せいな。

階段を登る人の群れは途切れない。その時、ブルブルと携帯が振動し、まどかは翔平が秋生だと思い、すぐさま携帯を取り出した。

遅れてごめん。もう着く。

翔平からのメールだった。また一瞬で緊張が体中を走った。遠くに目をやると焼きそばを持った咲と、その十メートル後ろ位に翔平らしい人が見えた。その隣に秋生もいた。秋生は部活帰りらしく練習着のままだった。強張った顔で何とか笑顔を作り、まどかは手を振った。それぞれみんな手を振り替えてくれた。まどかはその後のことはほとんど覚えていなかった。緊張しすぎていたのと、人に酔ったのとで、どんな会話をしたのか、何を見たのか、お賽銭を投げて何をお願いしたのか、たこ焼きの味がおいしかったのかどうかさえも。ただ一つ引掛かったのは秋生がいつも学校で言うおかしなギャグがこの夜、いつも以上にポンポン出ていたのに顔が少しも笑っていなかったということ。

その後まどかは秋生に家まで送ってもらった。それは翔平の計らいではなく秋生が自ら志願した。それにはまどかも翔平も咲も驚いた。帰り道にはもう意識がはつきりしていた。初めての二人きりという状況に落ち着かずドギマギして、あんなにシュミレーションした会話はすっ飛んでしまい、何も思い浮かばずに下を向いたり、チラッと秋生を見たりしながら歩いていた。秋生も急に静かになり、たまに沈黙を破るようにポツリポツリと翔平や部活の話をした。秋生の様子はやっぱりいつもより変で、それが余計にまどかを緊張に走らせた。そしてまどかの家が見えた。

「あ、ここでいいよ。」

まどかは足を止めた。

「おう。」

秋生も足を止めた。何か言いたげに見えた。



「じゃーな。」

そう言つてすぐに歩いた道を戻つて行つた。やっと緊張から解き放たれたまどかは気が抜けて玄関前でつまづいてしまった。自分の部屋に戻り、すぐに服を脱いだ。

「あー緊張した〜！」

ベッドに横たわり、すぐに秋生にメールをした。

送つてくれてありがとう。気を付けて帰つて下さい。

部屋着に着替えているとすぐ返信が来た。

サンキュー。また明日な。

まどかは笑顔で携帯電話を見つめた。秋生と距離が近付いたような気がして嬉しくてくすぐつたいような気持ちになった。

（さっき何を言おうとしたんだろう？ ひょっとして秋生君も私に気があるとか？ キャー！ なーんて。）

すぐにまた翔平に帰りの報告をした。

「よかったな。もう秒読みなんじゃないか？」

「いやー、そんなことはまだないよー。でもすごい嬉しかった。翔平君のおかげだね。」

「自ら送つて行くとは思わなかったもんない。びっくりしたよ。」

「えへへ。」

まどかは照れ臭そうに笑い、その後三十分位話して疲れて眠つた。

翌日、祭りは三日目の最終日。まどかは出掛けずに家にいることにしようと思つていた。だが、中学からのバスケット部のチームメイトの倉橋倫代に帰り道に誘われた。この日は体育館ではなく外の練習だったので比較的疲れてはいなかった。どうしようかと思つたが、飴細工のことを思い出した。

まどかは露店の中で飴細工を見るのが一番好きだった。毎年は来て

くれないので来た年にはいつも見に行っていた。頭に鉢巻きをしたおじさんが、箱から手に握れる位のお饅頭みたいな形の透明に近い薄い白い色の状態の飴を取り出して、札を見たお客さんから注文された物を次々に手際良く作っていく。真ん中を押してくぼみを作って少し伸ばし、筆でちゃんと色を付けるとぐにやぐにやに伸ばして重ねてを繰り返して全体にまんべんなく色を馴染ませ、また元の形に丸める。それは大きなパワーストーンのように美しかった。それを割り箸の先端に固定する。生暖かい飴が固まらない内に指で引っぱり、手の平で押したりしながらハサミで形を整え、切ったりしてまた筆で色を付け、あつという間に動物の形が姿を見せる。初めて見たときまどかは感動した。そしてしばらくおじさんのマジシャンとも思える技の数々を見ていた。最初は見ていただけだったが、数年後には何かを作ってもらっていた。単純なあひるやうさぎはすぐできるので値段が安い。次に来てくれた時には一番高いペガサスを作ってもらおうと思っていた。ペガサスの飴細工は幼い頃からのまどかの憧れであった。そう思うと無性に行きたくなる。去年は来てなかったから今年は来ているかもしれないと思った。まどかは倫代の誘いに乗り、また家に帰って服を着替えて出掛けた。最終日ともあつて昨日よりも混んでいた。倫代はウキウキして鼻歌を歌っていた。

「それ、何の歌？」

「美優の新曲！すごいいいよ！あたし最近大好きなの、美優！」  
倫代はやや興奮気味でまどかを見た。

「美優か、テレビとかでちょっとしか聴いたこと無いけどそんなにいいんだ。」

「うーん！詩がね、切ないの！片思いのもどかしさっていうか、言いたいけど言えないみたいなキュンっていうか、マドちゃんわかる！？」

倫代は力説して質問した。

「ハイハイ。」

「ちよつとお、何よその反応！明日CD貸してあげるから聴いてみなさいよ！」

まどかは倫代の言う美優という歌手はあまり好きではなかった。顔は可愛らしいが声が好きになれなかったのだ。しばらく歩くと昨日は目に入らなかつた飴細工が見えた。

「あつ！来てる！みつちゃん、私あれが見たい！！」

まどかが指を指した先を見て

「またあ？！マドちゃんずっと前もへばり付いて見てなかつた？」

「えっ、そうだった？」

倫代の方を向いて笑い、また前を向いた時にまどかは人混みの中に秋生を見つけて立ち止まった。

「あいたつ。」

倫代がまどかにぶつかった。

秋生は飴細工の店の隣りのイカ焼きを買っていた。隣には浴衣姿の女の子がいた。

まどかは物凄い動揺をした。楽しかった祭りの雰囲気も周りの音も全てが一瞬で無くなった。だがすぐに我に返り、倫代にその様子を悟られたくなかつたまどかは、一瞬でくるつと後ろを向いた。

「やっぱり、先に何か食べよう・・・。」

後ろを見ないように倫代の服の裾を引っ張った。

「そうだね、そうしよう！」

倫代は空腹だったのでその案に賛成し、まどかの様子には気付かなかった。

振り返つてすぐの店で串焼きを買おうとした。出来上がった物は売れたばかりで焼けるまで少し待たなくてはならなかった。倫代は白い煙を出してジュージューと油を出す豚肉を食い入るように見て、早く食べたいと漏らした。だがまどかは、チラチラと横目で二人を見て、本当に秋生だろうか、見間違いではないだろうか、そう、秋生の双子の弟の夏輝ではないだろうかと確認した。長身で、髪をツンツン立てて、大きな声で笑う、毎日教室で聞いていた声だった。

隣りで見ていた笑顔だった。そしてイカを無邪気に食べ、女の子に話し掛けながらこちらに向かって歩いて来る。秋生に見つかりたくなくて、屋台の台から垂れ下がっている「ポテト300円」の札を見ていた。秋生に早く後ろを通り過ぎて欲しかった。

「おじさん、すっかり焼いてね。」

そう言つて倫代にブーブー言われた。

「どういふことかはつきり言えよ！」

翔平の怒りの混じった声が公園に響いた。倫代と別れた後、まどかは家への帰り道で翔平に電話をかけた。翔平はすつとんで来てくれた。駅の近くの公園でベンチに腰掛けて、まどかは芝生を落ち着き無く歩きながら電話する翔平を見ていた。街頭に照らされた翔平の影が伸び縮みを繰り返す。

「なんだよそれ・・・。」

翔平が自宅からここまで来る間にまどかはだいぶ落ち着いてしまっていた。一方、翔平は怒り冷め止まぬ感じで電話の向こうの秋生に説明を求めた。

「もう、お前とは口を聞かない。」

電話を切つて頭を抱えてその場にしゃがみ込んだ。

「なんだよあいつ！くそっ！」

むしゃくしゃしている様子で翔平はため息を付いたり、頭をかきむしったりし、いつもののんびりした様子は欠片も無かった。まどかはベンチから離れ翔平の方へ近寄った。翔平の隣りに座り込んで芝生をプチプチと引っかく。それを見て、翔平もあぐらをかいて座り込んだ。少し沈黙が続いた。

「ごめんね・・・。」

翔平はまどかを見た。

「お前が謝ることないだろ！？悪いのはあいつと・・・あいつと俺だよ。お前は何にも悪くない！」

翔平は必死に言った。

「うん……。でも……。」

「なんだよ。」

下を向いたまま芝生を抜き続けながらまどかは言った。

「うん……。その……。宮本君と秋生君にこんなことで喧嘩っていうか、感じ悪くさせちゃって申し訳ないなーって……。」

「はあ！？こんなこと！？お前はあいつに傷つけられたんだぞ！俺はムカついてしょうがない！あいつがこんなことするなんてがっかりだ！許せない！こんなことじゃないだろ！」

翔平もブチブチと芝生を千切り取り、無造作に遠くに投げた。まどかは芝生を抜く手を止めた。

「だって、付き合ってた訳じゃないし……。秋生君に何か言われた訳でも無いし、ただ私が一人で勝手に舞い上がったただけだし……。」

「……。」

まどかは続けた。

「あの子、確かサッカー部のマネージャーしてる子だったと思う。

どこかで見た気がしたんだけど、さっき思い出した。」

「そうらしいな。」

「……。秋生君すごく楽しそうだった。昨日は少しも楽しそうじゃなかったのに。」

「そんなことないだろ。今朝だって学校で楽しかったって言ってたぞ。」

まどかは小さく首を振った。

「今思えば無理してたんだなってわかるよ。たぶん昨日一緒に回るの断れなかったんじゃないかな。秋生君はたぶん私の気持ちに気付いてただろうし。宮本君にも本当のこと話せなかっただろうし。だから、昨日は彼なりの優しさだったのかもね。秋生君は悪くないよ。宮本君もね。」

翔平はまどかの方を見た。

「・・・悪いのは私だよ。」

「なんでそうなるんだよ。お前は被害者だろ。」

「うっん、私は全然女の子らしくないし、どっちかっていうと男だし・・・胸だつて無いし。」

翔平は思わず鼻で笑った。

「さっきの子は浴衣着ててね、悔しいけど可愛かった。下駄を履いて歩いて危なつかしくて、なんて言うか、守ってあげたくなるっていうか・・・。」

翔平は意味がわからないと言った面持ちだった。

「だから、私が悪いの。二人がこんなことで喧嘩する必要ないよ。それに私、嬉しかったよ。宮本君のおかげで秋生君と仲良くできたし、楽しかったし。私に悪いとか思わないで。早く仲直りしてよ。」  
鋭い目つきでまどかに言い寄った。

「あいつのこと許せるのか!？」

まどかは少しビクついたが、冷静さを保ったままだ。

「・・・だつて秋生君だつてこうしたくてした訳じゃないはずだし・・・  
・・・かわいそう。」

翔平は両手を地面につけてうなだれた。

「お前つて本当に・・・。」

「何？」

顔をあげた翔平はまどかを困った目つきで見た。

「なんでもね。」

見上げると月があつた。空は雲が無く、月の光は神々しく見えた。

「宮本君はさ」

まどかが言いかけた。

「翔平でいいよ。」

「え？」

「同じ中学の女子はみんな俺のこと翔平って呼んでるから、お前も翔平でいいよ。ずっと言おうと思ってたんだけど、お前に宮本君って呼ばれるの何かかゆくなるんだよな。」

「失礼な！」

「翔平でよろしく。」

「んーじゃあ、しょうがないなあ。」

まどかは咳払いをし、若干照れて

「翔平・・・くん。」

「あれっ。」

翔平は首を横に傾げた。

「くんはいらない。」

「翔平君でいいの。」

「あっそ、反抗的なやつ。」

まどかは芝生に寝転がった。翔平は少し驚いた。

「あーまたダメだったよー！！何でこんなに彼氏できないんだろー！！」

投げやりにゴロゴロ転がって叫んだ。翔平から三メートル位離れた所でうつ伏せになり、静かになった。

「あきらめんなよ。」

離れた所から翔平の声が響いた。まどかは顔を上げて起き上がり、またその場に座り込み翔平の方を向いた。服に少し土がついて汚れていて、顔にも葉っぱのような物が付いている。

「たぶん、あの二人はすぐ別れると思う。持っても多分、半年位だ。」

「なんで？」

「勘だな。それにあいつはお前が嫌いな訳じゃないし、その頃にまた頑張ってみてもいいんじゃないか？」

「・・・そうかな・・・。」

「お前の自由だな。」

翔平は立ち上がりまどかのいる方へ歩いて来た。

「今までは正直なところ、面白半分な所もあっただけどこれからは全面応援するから何かあったらいつでも言え。」

まどかはその言葉が嬉しくてにつこり笑った。今までが面白半分で

ある訳が無い。さっきの怒った様子でも充分にわかっていた。自分のために何かしてくれようという気持ちなのだろうと感じ取れた。

「ありがとう。またいろいろ相談するね。とりあえず今日はもう帰ろうか。」

時計に目をやると十時を過ぎていた。

「うわー！いつの間に！」

まどかと翔平は公園から急いで走って出て行って別れた。神社の方からは祭り帰りの人々がぞろぞろと家路へと歩いている。浴衣を着てお面を被りながら余韻に浸る家族。疲れて眠ってしまい、親に抱かれている子供。手をつないで歩くカップル。オレンジ色の街灯に照らされ街も人も眠りに就こうとしているかのように見えた。その中を一人逆走して家へと向かう。まどかは失恋は既に何度も経験済みだったが、今回は期待が大きかっただけに傷は深いと思っていた。でも自分でも驚く程に立ち直りが早く、楽しい気持ちで走っていた。こんなことは今までに無かった。その時、まどかの中に今までとは違う新しい気持ちが生まれていた。

（眠っている場合じゃない！早く家に帰ってこの気持ちを日記に書かなきゃ！）

しかしまどかは、家で帰りが遅いことを怒られ勲と響子からお説教を受けることになったため、日記を書くことはできなかった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4580d/>

---

明日に背く花

2011年1月21日02時16分発行